



TITLE:

# 清代湖南のギルドマーチャント：洪江の十館首士の場合

AUTHOR(S):

仁井田, 陞

---

CITATION:

仁井田, 陞. 清代湖南のギルドマーチャント：洪江の十館首士の場合. 東洋史研究 1962, 21(3): 315-336

ISSUE DATE:

1962-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152615>

RIGHT:

# 清代湖南のギルドマーチャント

—— 洪江の十館首士の場合 ——

仁 井 田 陸

## 第一節 序 説

中國社會のギルドの研究は、今堀教授によつて高度の域にすめられている。<sup>①</sup>その取扱われた地點が内蒙古長城地帯に限られてはいても、その研究方法と成果とは、中國社會のギルドについて廣く參考とすることができ性格のものである。また根岸博士のギルドに關する三つの著作についても、<sup>②</sup>參考となるところが多い。私が湖南の一地方都市、洪江のギルドマーチャント——十館結合——について所見を發表したのは、昭和二十二年であつた（歴史學研究會）。この問題について、私は「中國の社會とギルド」のなかでも、しばしば言及はしたけれども、その後、他の分野の研究に没頭して、所題の問題は心ならずも後廻しにしていた。今回、根岸、今堀兩氏の説をあらためて參考しつ

つ、所見を發表する。

本文の基本的な資料文獻は、洪江育嬰小識四卷である。書名のなかの育嬰というのは、次のような意味である。舊中國社會では人は生れたからといつてその生存は保障されてはいなかつた。——「私權の享有は出生にはじまる」（日本民法第一條ノ三）とは、まるで段階がかけ離れていた。——。養えるあてのある人口、勞働力に見合つた人口以外は、生れた刹那に棄てられ、あるいは殺されかねなかつた。このような嬰兒はおびただしい數にのぼつていた。育嬰とはこのような嬰兒を拾つて養育することである。育嬰は清朝以前から政府自らの任務とすべき行政の一部分であつた。しかしそれは表向のことであつた。清代の洪江の地方政府でも、自らはその事業から手をひいて、ギルドマー

チャント——十館首士——にそれを受持たせていた。このような關係にある育嬰をこの文獻は表題としてしているのである。この文獻によると、ギルドマーチャントが受持たされ、あるいは自らすすんで受持つている（がごとき）事業は、しかしそれだけではなかつた。難民の救護、貧民の救済、穀物の常備はおろか、軍隊、民兵隊、警察隊、消防隊の組織運営のような都市行政についてまで、ギルドマーチャントに委ねられ、その經濟的裏付もほとんどすべてギルドマーチャントの負擔となつていた。ギルドマーチャントの側では、官憲の押しつけを「いや」とはいえず、都市の行政に關しては、ことの大小となく主な世話人となつて、その處理に任ずる破目におかれていた。<sup>④</sup>つまり洪江のギルドマーチャントは、官憲の怠慢による行政の空白をうずめる役目を背負わされていたのである。ギルドマーチャントとしても、その空白をうずめるのでなければ、商業資本のよつて立つ封建社會が崩れてゆくのであり、その努力の効果はどれほどであつたか問題にしても、封建社會をほりくずす内部矛盾をうちすてはおけなかつた。空白をうずめることも、結局は商業資本自らの利害につながることであ

つた。しかし、實は官憲とギルドマーチャントとは双方「互に利用し合う」關係にあつたものであり、ギルドマーチャントも官憲にもたれかかることに利益を見出していたと思われる。ところで、このような關係の成立の經過を知るべき資料は案外に少い。この文獻は名稱はまるでギルドマーチャントに縁がないようでありながら、内容は全く別であり、この文獻はギルドマーチャントの歴史的研究の上から、はなはだ貴重と思われる。そこで私はこの文獻によつて、上記のような關係の成立時期と成立經過とを目標に、文獻の内容を組立てなおして見ることにした（第三節後半参照）。この文獻には光緒十三年の刊記がついてゐる。序文は光緒十四年の湖南の靖州知事潘清と、同年の靖州會同縣知事汪文修のものである。刊記の年と序文の年との間の一年程度のくいちがいは、間々あることではあるが、問題は、序文の主の靖州知事潘清と靖州會同縣知事汪文修とであり、しかもこの兩名の役人がこの文獻に「主修」としてその名を連ねていることである。因にいうが、洪江は靖州會同縣に屬していた。この文獻には序文ばかりでなく、この兩名の役人が出した洪江關係の命令などが、幾通

も收録されている。そしてこの文獻の「編輯」として名を出しているのは、貴州鎮遠府天柱縣の人、歐陽鐘であつて、彼と官憲とのつながりは密接であつたようである。彼は桐油仲買人としての特許狀（牙帖）を官憲から受けようとしたときに、洪江の同業者から連名で問題にされた人物であつた。彼はギルドマーチャントの役員であり、育嬰の世話人であつて、仲買手數料（用銀）から實費を差引いた收益を、育嬰の資金として使用することをくろんで特許狀を得た。しかし油號の同業者にいわせると、たとえ取引は取引者の自由であつて（任客投行）、誰も干渉ができない建前になつてゐるとはいうものの、育嬰の名目を看板に取引されたのでは、同業の利益がおびやかされることになる。同業者は官憲に對して共同で意見書を提出した<sup>⑥</sup>。そのいきさつに關する一件の書類もこの文獻に收録されている。この文獻の成り立ちと内容とは以上のようなものである。つまりこれをギルドマーチャントの記録として見るにしても、その條件を心得ておかねばならない。私は右のような條件を承知した上で、この文獻を取扱うようにしたいと思う。

ところで私は、この文獻から、ギルドマーチャントを引出そうとしている。中國のギルドマーチャントについては、その成立過程によつて諸型態があることは今堀教授の指摘されているところである。それでは私がここでいう洪江のギルドマーチャント——十館首士——は、どのような性格のものであるか。それは根岸博士がかつて同郷團體の聯合としてあげられた重慶の八省會館首事、沙市の十二會館の會首に見られるものなどと、近接したもののものである。これらのギルドマーチャントは、いずれもその下部組織として、いくつかの同郷團體をもつた點に共通特色がある。この文獻に見るところでも、洪江のギルドマーチャントは、江西商人、江浙商人、貴州商人などの同郷商人團體を下部組織としていた。十館とは洪江における代表的なこれら客商仲間によつて建設された十の會館であり、各會館から選ばれた首士（會首人などともいう）、つまり十館首士が、共同しての市政の世話人となつていたのである。今堀教授は重慶の八省會館首事をもつて、ギルドマーチャントの一つの形態とされているが、それが認められるとすれば、洪江の場合もギルドマーチャントから排除する理由は

なさそうである(第二節および第三節前半)。

しかしその場合でも、私はなお次のことを吟味したい。

洪江育嬰小識は、さきに述べたような条件をもつた文獻であつて、それには商業規制および商業資本の仲間の利己主義については直接書かれていない。その點はどう考えたらよいか。洪江のギルドマーチャントの側には、商業資本として問題にすべきものがなかつたかどうか。私が思うのに、この洪江育嬰小識にそのことがあらわれていないのは、それだけの理由があつたものと思う。それはそのような問題までをそれに書く必要がなかつたから——そのようなことを書く目的のものではなかつたから——ではないかと思う。官憲から洪江のギルドマーチャントが事業を最初受持たされた年代は、同治五年(1866)、また最初受持たされた事業は、軍隊||民兵隊であつた。しかもその武裝の官給は期待できなかつた。その後、光緒年間に入ると、例年のように事業を受持たされていつた。しかし、おそらくこのような事業を受持つために、ギルドマーチャントが組織されたのではなかつたらう。洪江のギルドマーチャントの成立期は、同治五年から前にあるものと想像されるが、

その時期に商業規制か何か、商業資本自らの共通の利害によつて、ギルドマーチャントが組織されたものであつたらう。私は洪江ギルドマーチャントについて、その職能の上から、時期的に二段の構想をもつ。第一段は自らの利害のために動いた時期、第二段はその組織が官憲に利用されるようになつていつた時期である。この第一段が洪江育嬰小識にえがかれていないギルドマーチャントであり、第二段がそれにえがかれているギルドマーチャントではなからうか(第三節前半)。

なお洪江育嬰小識は、(一)東京大學東洋文化研究所大木文庫本と、(二)著者藏本との間に版の上で差異がある。共に刊記は光緒十三年ではあるが、(一)ではある重要部分が落ちてゐる。しかし落丁かどうかはつきりしない。丁數もつけられないまま、版心が黒く放置されているところがある。(二)では(一)に缺けている部分があり、丁數もついている。

①今堀誠二「中國におけるギルドマーチャントの構造」(近代中國の社會と經濟 昭和二六年三月 二〇五頁以下)。また註⑤の文獻参照。

②根岸佑「支那ギルドの研究」(昭和七年十二月)、「上海のギルド」(昭和二六年四月)、「中國のギルド」(昭和二八年四月)。

⑧仁井田陸「中國の社會とギルド」(昭和二年一月)五一、八七頁、ことに五頁以下および一〇八頁。昭和二年歷史學研究會講演のときの演題は「清代湖南一地方都市の行政とギルド」。なお後に記すような育嬰のことだけならば、洪江育嬰小識をすでに「支那身分法史」(昭和十七年一月)八三〇頁に引用しておいた。

④洪江育嬰小識卷一凡例は、この文獻の問題點を見るのに好都合なので、以下に抄録しておく。

一洪江育嬰較它郡縣異、一切創始、無可率由、覃思研精、務求實際、故措置有屢更而始定、收養則推行而愈廣、縣歷八載、規模漸闢、堂置屋產萬金以上、費用逾二萬緡、是皆十館紳商好善之施

一側隱堂掩骼埋斃、創自道光十八年。自何侯諭歸十館經理、遂與育嬰並行、義渡義山、側隱之條目、他義渡義山義園類也、故並次焉

一汪侯就側隱堂內創設保甲局、專屬之十館、通稟示諭有案、昔之國防、首尾連十餘稔、歷閱營別練一軍助防備剿、餉精不虞於官、至光緒六年始奉停止、當州城被圍、縣城再陷、附近諸鄉無不被其荼毒、惟一方屹然獨完、類有天幸、其時所修關隘、至今沿而不革、……

一咸豐同治之際、火災屢見、發如燎原、于是創建火牆、置水龍、亟圖補救、祝融之威迺澹、水龍色目繁瑣、火牆類時修治、貴謹守焉、故詳次之

一道光己酉、同治丁卯、光緒丙戌、三次平糶、情形不同、要皆米艘翔集不至、思之痛深、賴張侯積穀三千石、汪侯加積穀一千

石、分存十館、夫天災流行、何地蔑有、備而不用、緩急可資、故謹次焉

一洪江幅員盡于全市、……通行衡寶諸郡道路橋梁、光緒乙酉毀于水、汪侯勸修之、其經費取資于洪江商衆者、故并次焉

一是編以育嬰爲綱領、故鉅細特詳、雖側隱亦皆從略、他如工程寒衣之類、亦通力合作之舉、故皆次焉

⑤今堀誠二「中國封建社會の機構」(昭和三〇年三月)二八頁以下。「都市の行政に關しては、こと大小となく云々」の文は、今堀教授の前掲論文五九頁の文を少し變えて引用した。

⑥洪江育嬰小識卷一識翰助。

州正堂潘爲出示曉諭事、光緒十三年正月二十八日案據洪江洪白桐油商民張積昌嚴恆豐高燦順方鼎昌王恆聚恆泰隆朱致大稟稱、……光緒十一年局紳歐陽鑑、遵牙釐新章捐領洪白桐油牙帖、牌名歐陽濟育、歲獲用銀、除薪水繳費外、所餘概充育嬰經費、……商等目觀善舉攸關、莫不樂投歐陽濟育納用、以裕嬰費、祇恐有增捐新帖、邀截商貨、勒商改投伊行、致滋爭競、查牙帖定章、任客投行、不得邀截抑勒、商等仰體好生之德、皆樂投歐陽濟育油行納用、以濟育嬰、無論何人捐增新帖、不得向商等滋擾、以免後累、……

光緒十三年四月初八日

## 第二節 洪江の同鄉團體とギルドマーチャント

### の下部組織

本節では、清末の湖南一地方都市、洪江の商業に主導力

を握つていたギルドマーチャントの下部組織を記述する。この下部組織は、それによつて立つギルドマーチャントの性格を決定するものである。

洪江は貴州省に近い湖南省西部の都市であつて、沅江の上流地方にあり、桐油市場としてその名があらわれている<sup>①</sup>。この地方には清代にあつても東のかた江西、江蘇、浙江、福建などの地方の商人が長江と洞庭湖および沅江を経て往來し、その郷土の物産をもち來り、そして洪江地方の物産たとえば桐油をもち歸り、——片貿易だけではなしに——遠隔地貿易をつづけたのであつた。貿易路は西のかた貴州雲南（黔滇）にも連り、南のかた廣東はもとより廣西（桂林）にも通じていた<sup>②</sup>。山西や湖北の商人もこの地に往來した。洪江をめぐる湖南内部の近接地帯——長沙、衡州、寶慶、辰州、芷江（沅州）、黔陽、靖州、綏寧、會同、通道など<sup>③</sup>——の商人との取引ももちろん盛に行われていた。これら流通圏を擔當する地方商人＝客商は、同郷またはその周邊ごとに仲間——幫——をつくつていた。洪江における地方商人の活動は時によつて消長がなかつたわけではない。光緒ころの情勢についていえば、江西幫の活動は

最もめざましく、桐油、洋土藥（アヘン）、布疋、茶油、糖斤を取引の目的物としており、江浙幫の活動これに次ぎ、上記のもののほか南貨、槽坊（酒）も取引の主要なものの中に加えていた。貴州商人は土藥の開禁後、これをこの地に運び、その取引は材木膏油と比敵するぐらいであつた<sup>④</sup>。また湖北の黃漢幫は布帛を、福建幫は各種の絲煙（きざみ煙草）を取引の目的物としていた<sup>⑤</sup>。なお新安會館碑記（年代不詳）によると、新安商人が湖南に來るときは淮場の鹽、通州の棉と布、江西の瓷器をもたらし、去るときは桐油、材木、白臘をもち歸つた<sup>⑥</sup>。浙江湖州館記（清末）によれば、乾隆年間、湖州出身の醸造業者が多數この地方に住みついていた。そして浙江商人は長江を利用して、膏油、材木をその郷土におくり、棉布、瓷器をこの地方にはこび、隔地間貿易でその利をあげ、嘉慶二十三年には洪江に湖州會館を建設した。しかし咸豐同治以後は、湖州商人の取引のもつとも盛であつた時期の情勢は見る事ができなくなつたということである<sup>⑦</sup>。

これら商人はこの地に會館（また公所ともいう）を建設し、仲間のよしみを結ぶ場所とした。仲間はその守護神を

ここにまつり、その神殿を置き、戲臺（舞臺）をつくつて、守護神の祭典の日には演劇を催した。會館建設の古いものは康熙、雍正、乾隆の年間にさかのぼる。

たとえば江西商人は江西會館を建設してここに許眞君（主祀）と蕭晏二侯を祀つた。洪江萬壽宮記によると、明代すでに會館があつたらしいが、康熙十五年（1676）新しい場所をもとめて、そこに改めて建てなおしたのであつたという。また福建商人は福建會館を建設してこれに天后をまつり、江浙五府（蘇州府、徽州府、池州府、湖州府および寧國府）の商人は、その會館に關帝をまつり、黃州商人は康熙四年（1665）に黃州會館を建設し、これに福主張瑞をまつた。また湖南の寶慶商人は寶慶會館に關帝を祀り、同じく辰州府沅州府の商人は辰沅會館に伏波將軍馬援をまつり、貴州商人は貴州會館に南將軍雲雲をまつた。<sup>④</sup>湖南・貴州の靖州、綏寧、會同、通道、天柱、開泰、錦屏七縣の商人は、その共同の七屬會館に關帝を祀つていた。<sup>⑤</sup>洪江育嬰小識には洪江における會館名とその建設年代を一括しているから、次にそれを採録しておく。<sup>⑥</sup>

江西會館（萬壽宮）、曰江宗盛、原在洪盛碼頭、康熙十五年移建。

#### 大河邊桅桿坪

洞庭宮（南昌府公所）、在大河邊、乾隆三年建

徽州會館（一日新安館）、合五府曰吳鼎和、在司門口正街、康熙二十年建。

湖州府館、在荷葉街、乾隆四十年建

蘇州府館、在龍船境、乾隆三十六年建

九華宮（青陽縣公所）、在老街、嘉慶十九年建

琴溪堂（涇縣義園）、在小河對岸、道光十八年建

貴州會館（忠烈宮）、曰貴鼎新、在桅桿坪、嘉慶二十二年建

福建會館（天后宮）、曰福昌隆、在巖碼頭、<sup>⑦</sup>年

黃州會館（福主宮）、曰黃齊安、在大河邊、康熙四年建

衡州會館（壽佛宮）、曰衡錫齡、在塘正街、道光二十八年建

寶慶會館（太平宮亦曰武寶館）、曰盛南都、在大河邊、雍正

年建

辰沅會館（伏波宮）、曰王有柱、在一甲巷、屢燬于火、乾隆四十二年重修

湘鄉會館（龍城宮）、曰湘萃庭、在新街、<sup>⑧</sup>年建

長郡公所、在牛頭境、同治七年建

湘陰公屋、在土橋境、咸豐十年建

七屬會館（關聖宮）、曰洪惟先、在大河邊、<sup>⑨</sup>年建

飛山宮（靖州公所）、在鼇龍坪、嘉慶十七年建

大佛寺（十館公所）、在大河邊、先爲僧雅雲建、<sup>⑩</sup>年、

十館集資重修

高坡宮、在鹽灘坡、先爲賀姓私祠、光緒二年、燬于火、十館集資重修



この記載によると洪江の會館の主要なものは、江西會館以下の十館であつて、これが洪江の商業の主導力を持ち、十館結合——ギルドマーチャント——が市政をうけもつていた。つまり、このギルドマーチャントの下部組織は同郷團體であつた(次節參照)。なお、十館のほかに諸會館があつて、十館よりは一段低く書かれている。この諸會館のうちに、たとえば江西のうちに屬する南昌商人だけが江西會館とは別に建設した南昌府公所がある。江浙のうちに屬する湖州府、蘇州府および青陽縣商人が、江浙五府の會館とは別にそれぞれ獨立して建設した湖州府館、蘇州府館および青陽縣公所がある。天柱、開泰諸縣の商人とともに七屬會館を建てていた靖州商人だけが獨立して建設した靖州公所の類もある。このような諸會館は、同郷團體を代表する十會館と同列には見られていない。それは同族についていえば、大宗祠とは別に同族の分派ごとに建てられてた支祠のようなものである。<sup>⑧</sup>

同業集團のギルドや同郷集團はその仲間的な互助の一つの使命とし、互助の強さは仲間結合力を測定する手がかりであつた。幫という文字はこのような仲間集團をあらわす

とともに、互助という意味のものでさえあつた。<sup>⑨</sup> 中國の同郷仲間の一般の例であつたように、洪江の多くの會館では義山をもつていて、同郷人でこの地に客死したものの葬祭を行つていた。また水難救助の救生船<sup>⑩</sup>をもち、義渡(無料の渡船)をつくつていた。それらは次節でのべる惻隱堂の義山、救生船および義渡とは別ものである。江浙五府連合のうちに屬した湖州府仲間の記録では、義山を買つて旅先(洪江)で死亡した同郷人をそこに葬り、毎年祭事を行つた。同郷人の間に失業者(財産を失つた者)が出た場合、また、よるべのない年より子どもがあつた場合はこれを救済し、歸郷の旅費がない同郷人にはこれを與えていた。<sup>⑪</sup> 同じく五府連合のうちの涇縣(寧國府)の仲間の記録では、湖州府のように獨自の會館はもたず、仲間の議會も演劇も行わなかつたが、涇縣義園(琴溪義園)を設置して、同郷人の死者の柩をあずかり、柩の受取人がないときにはこれを葬り、清明・中元の二節には祭事を行つた。歸郷の旅費のない同郷人にはこれを與え、同郷人の失業者でよるべがなく生活の立ちゆかないものにはその生活をたすけ、死亡して葬式が出せないときは義園でこれを行つた。

また同郷人寡婦で生活に困っているものにも隨時救恤することにしてゐた。私が資料としてゐる洪江育嬰小識の内容は、同郷をこえた事業としての育嬰や救生船のような公益慈善事業や、團練保甲のような軍隊や警察の問題などに重點がおかれていて、他の記事は簡略であり、上記のような同郷人だけの仲間互助の記事にもそれほど紙面をさいてゐない。仲間の間の紛争の調停や仲間に対する制裁——仲間規約に反した場合には神前に罰香や罰臘や罰錢や罰戯（演劇）をささげさせ、あるいは除名する——についての記事もない。ただ洪江の桐油仲買業者（牙行）が仲買特許狀（牙帖）の新たな發行によつて、仲間の利益がおかされる懸念が生じたときに、共同提議を官憲に對して行つたこと<sup>⑤</sup>ぐらいが、多少目立つ程度である。しかもこの牙帖發行も育嬰事業に關係があつたからとくに取上げられていたまでのことである。育嬰その他この種の問題に關係がない商業規制や商業資本の問題は、この文獻に書いてないだけに、實際にはいくらでも起つていたはずと思われる。従つて、同郷人または商人仲間に関する記事がめだたなかつたり書いてなかつたりすることだけによつて、仲間の内面的結び

つきを低く評價するには及ばないであらう。

①湖南方物志（三長物齋叢書）卷六沅州府。康熙元年、知縣張扶翼が勤めて桐を植へさせたことが出てゐる。湖南通志卷六十一食貨（物産）はこれとほぼ同文。

②洪江育嬰小識卷四識宛委、洪江萬壽宮記「吾鄉萬壽宮立有年矣、……前明故宮。側於巷隅、……時我邦人質遷於洪有、咸曰故宮雖在、舊址仍蕪、不爲更新、而享祀之儀、母乃有闕、康熙初、因僉謀移於江之上游、得賀氏業而售之、……乾隆二十有九年、乃增修廟事、……嘉慶十有五年復增舊制、……宮之正殿、主祀者爲眞君、前殿爲蕭晏二侯、皆吾鄉之有功德於民者也、……」

③仁井田「中國の社會とギルド」（昭和二十六年十一月）一〇八頁「長江は地方物産交流の大動脈である。」

④流通圈を擔當する客商一般については、根岸佑「支那ギルドの研究」（昭和七年二月）四二頁、七三頁以下。同「中國のギルド」（昭和二十八年四月）八七頁以下、九一頁。加藤繁「支那經濟史概説」（昭和十九年三月）九七頁、一〇〇頁。

⑤洪江育嬰小識前掲、貴州忠烈宮圖記。

⑥洪江育嬰小識卷一識十館「乾隆十六年奏請頒換洪江巡檢司印、詳具洪江識中、當是之時列肆如雲、川楚之丹砂白蠟、洪白之膏油、材木之堅美、乘流東下達洞庭、絕長江而濟吳越、連橋大編、銜尾溯波而上、瓊貨駢積、率倚花布爲大宗、南通桂林、西趨滇黔、利市三倍、居市者長子孫、百工技術之流、極至而輻輳、地偏人衆、至闢山澗谷連屋崇樓櫺比而居之、無游手、無閒民、俗尙儉嗇而習事、長老則不侵然諾、好禮義而重犯法、固儼然西南

一都會也、客籍流寓者、咸立會館。以歲時祭共所先、洽比鄰里、於是江有江西祀許眞君之館、曰江宗盛、福建祀天后之館、曰福昌隆、江浙五府（蘇州府徽州府池州府湖州府寧國府）祀關帝之館、曰吳鼎和、黃州府祀福主張瑞之館、曰黃齊安、山西陝西省祀關帝之館、曰樊天錫、寶慶府屬祀關帝之館、曰盛南都、辰州府沅州府屬祀新息侯馬援之館、曰王有柱、靖州屬及天柱開泰錦屏七州縣、合祀關帝之館、曰洪惟先爲八館云、自洪楊諸逆起廣西、據金陵爲窟穴、時蹂躪大江南北、材貨阻而不下、關陝之賈絕蹤、……黔苗首難、蝟蟻沸羹、所在糜爛、一時衣冠右族、瑣尾流離、避地洪江、僦屋騰踊、幾什倍常值、是時已開煙禁、權稅餉軍、于是黔南之士藥絡繹道途、修業而息之、居然與材木膏油相埒、黔人祀南將軍齊雲之館、曰貴鼎新、衡州府屬祀壽佛之館、曰衡錫齡、湘鄉縣祀關帝之館、曰湘萃庭者、同時崛起、稱十館焉、其不列十館者、曰長沙館、湘陰館、則以規模狹隘、有待擴充、若湖州館、蘇州館、青陽館、南昌府屬之洞庭宮、原析列吳鼎和江宗盛之內、譬猶族姓之有支祠也、它如兩粵之蔗糖、滇蜀之土藥、率由轉轂相貿易、無富商大賈自至者、此其大較也、……」この次に本文に引用したように、江西、徽州など各會館の建設年代や建設地などが列記してある。

⑦ 洪江育嬰小識卷四識宛委、重定衡州會館規條序。

⑧ 同上、重修洪江飛山宮記。これは湖南靖州商人關係記事である。なお七屬會館碑記では、靖、綏、會、通のような貴州省に近接した湖南省地方商人と、開泰、錦屏、天柱のような湖南省に近い貴州省地方商人との結合を示す記事をふくむ。

⑨⑩ 註⑥参照。

洪江育嬰小識卷二識經費、附歐陽鍾稟（光緒十四年正月二十一日）「敬稟者、竊附生於光緒七年入育嬰堂、辦理筆節、旋兼惻隱堂、十一年奉委保甲局務、伏念受廬洪江、育嬰善舉、保甲各衛身家、……查嬰堂原捐銀錢、先年儘數置產、別無存本生息、佃租而外、專恃月捐、而月捐大概請得一詳陳之、茲就全市生意設論、以洪白桐油爲最、次洋土藥、次布疋、次茶油糖斤、大約江西幫十居七八、江浙幫居其二三、合以南貨槽坊、當推爲次、洋土藥皆黔人置賣、故月捐在洪桐油伯仲之間、黃漢幫夙居布帛之利、又第居次、福建幫惟各色絲煙、八年所收、壹百餘千而已、寶慶辰沅七屬、歷歸館捐、每月各捐錢參千、衡州湘鄉館、每月各捐錢壹千、此歷來籌辦情形、尤爲彰彰顯著者也、自推行愈廣、嬰口日增、經費有常、歲用無定、屢經堂紳十館首士與同事劉宗昭通盤籌畫、既難再事籌捐、又屬節無可節、空梁仰屋、目擊艱難、情願自備捐款、請領洪白桐油帖、呈奉查議核准赴局上兌、于十二年四月發帖取用在案、兩年之間、除支薪水火食外、實捐過銀柒百兩入堂濟用」

なお卷一識輸助に記された各幫の捐錢記事によると、江西幫に衣庄、糖行、錢號、錢店、布店、麪館、紙店があり、江浙五府幫に槽坊、福建幫に糖行、煙行、煙店があり、貴州幫に土藥幫があり、山西幫に油號があつたことがわかる。

⑪ 洪江育嬰小識卷四識宛委、新安會館碑記の文にいう「初我徽人之以懋遷至者、康熙時爲盛、其來也、載淮場之鹽、通州之棉與布、江西之瓷、其去也、洪油材木白蠟、源源轉輸、絡繹于道、四十五年、建館于小河正街建準提菴于古樓脚、置產備租、以供祀費、……」

⑫ 洪江育嬰小識前掲、浙江湖州館記「洪江據長江上游、叩瀕黔門戶、其水能醴、程鄉以酒名古今、吾鄉之業、酤者居焉、乾隆中葉、至者尤衆、不惟靖綏會通皆有吾鄉人之業、即黔陽城步諸縣、浸淫而往者、亦嘗至十數家、率皆擁厚資積居居業、膏油材木、灌輸長江而達于海、瓊貨珍物、還歸于西南谿峒間、棉布其一也、瓷次之、源源往來、不絕于步、嘉慶二十三年、故老因創集瓷捐、建館于市之荷葉街、聯桑梓敘情好也、館之左右、造屋備租、爲居守者費、後五年、買義山于鯉魚田以葬旅殯、歲時展祭焉、鄉人有失業者、欣助之、老弱憫獨無告者、周之恤之、窮窘而不能歸者、贖之、以行鄉誼之隆、大略如此、咸同以後、至者漸希、……其旅居于洪江者、略如晨星亦寥寥可指數焉、……」

⑬ 註②参照。

⑭ 江西幫が萬壽宮を建てて許眞人を、福建幫が天后宮を建てて天后を、貴州幫が南大將軍をまつことは各地でみられた。たとえば根岸佑「中國のギルド」(前掲)九一頁、一五七—九頁参照。

⑮ 會館については註②および⑤以下⑭参照。

⑯ 洪江育嬰小識には、陝西館とか山陝館とか書いてあるところがあるから、この外にも陝西や山西人の會館があつたらしい。次節註⑦および⑭参照。

⑰ 洪江育嬰小識卷一識十館。

⑱ 註⑥参照。なお根岸前掲一五七頁参照。

⑲ 仁井田前掲一五頁以下。

⑳ 森田明「救生船について——清代における社會事業の一齣——」(史學研究六六號、昭和三年四月)一頁以下は、地域的に廣く、また歴史的段階をおつて記述したものである。その三頁

「各地における救生事業の諸施設は……など各種の名稱で呼ばれ、中には育嬰堂・施粥所を共營するものがあつた」(大冶縣志續編卷四建置)。また四頁「乾隆年間に至る頃になると、救生船の普遍的設置の要望が高ま」つた。五頁「乾隆を境に民間慈善的社會事業としての救生船は、官營政治的社會事業化への再編成を見たわけであるが、……民間救生船の同時的存在は注目されねばならない。」また一二頁「その後、徐々に主體財源の枯渇と、官督機能の弛緩にともなう救生活動の低下にかわつて、客體者たる客商の積極的協力が行われるに至り、彼等の商品流通に對する自營的安全保障機關相互の慈善機關へと三轉している。もつとも、この場合にしても、表面的には依然として、従来の地方廳の管轄下にある準官營の救恤機關として存在したことは言う迄もない。」

㉑ 義山をもつものは江西會館、安徽會館、貴州會館など。救生船をもつものは贛廬救生船の一、黔陽江西會館の三、貴州會館の一。義渡船をもつものは貴州會館の一、寶慶會館の一、綏寧紙幫の一、江西會館の四など。以上ともに洪江育嬰小識卷三識惻隱下参照。

㉒ 註⑬参照。

㉓ 洪江育嬰小識卷一識十館。卷三識惻隱下、琴溪義園。

㉔ 前節註⑥参照。

### 第三節 清末の洪江の「十館首士」——ギルドマーチャント——とその役割

洪江には江西商人仲間のような客商の集團を主導力とし

てギルドマーチャントが組織されていた。——この場合、油號のような地元の工商業の立場については書かれていないが、油號<sup>①</sup>や油牙行<sup>②</sup>は、地元の商人とは限らない。そのギルドマーチャントでは、前節に述べたような同郷的商人の仲間集團を解體することなく、これを下部組織としてそのまま存續させていた。洪江の代表的な十會館からそれぞれえらばれた首士——十館首士——が共同してギルドマーチャントの運営にたずさわった。首士はまたときに會首人とか首事ともよばれた。それはギルドマーチャントの役員であり代表者である。もちろんギルドマーチャントといつても、それは歴史的段階によつて區別しておかねばならないのであつて、この場合ギルドマーチャントの基礎はギルドといふよりはまた同郷團體であつた。それはかの重慶の八省會館や汕頭の萬年豐會館または沙市の十二會館に類するものがあつた。<sup>③</sup>今堀博士は重慶の八省會館をギルドマーチャントのなかに入れておられるが、その説が許されるとすると、この洪江の場合もギルドマーチャントから排除する必要はないと思う。

ところでここに重慶の八省會館というのは、廣東、浙

江、福建、湖廣、江西、江南、山西および陝西の同郷商人仲間によつてそれぞれ建設された八つの會館であつて、會館は光緒十八年（1892）以前には存在していたと思われる。この八省會館の首事（役員、代表者）は互に相連絡し、地方官憲と協力して公共事業に盡力し、地方税額を定め、消防隊や義勇兵を組織し、さらに重要な銀行の破産を整理し救済基金を作り、孤兒院、養育院などを經營した。

會館はこれらの事業に干與するためその支出金は決して少くなかつた。汕頭の萬年豐會館には、そのなかば前身の時期としての漳潮會館の時代があつた。これは福建の漳州人と廣東の潮州人との連合から成る商人團體によつて建設されたところであつて、その商人團體は同市の商業を支配していたものである。ところが漳州人が失脚した後で、同治五年（1866）ごろ、潮州府屬の六縣人だけで萬年豐會館を設立した。潮州府屬の六縣人は三縣人づつ二つに區分せられ、それぞれ一つの會館を建てたが、しかも同時にその高次元の結合としてこの統一的な萬年豐を建設したものであつた。萬年豐の下部組織となつている各同郷會館からは、それぞれ二十四名の代表者を出し、合計四十八名が委員會

を組織し、外部ことに官邊との交渉をうけもち、内部に對しては仲間の紛争の調停などを行つた。この委員會の任務とするところは廣汎であつて、仲間の商業上の利害に關することが多い。たとえば度量衡や貨幣を統一し、手數料の歩合を一定し、決算日を決定し、貿易取締規則を實施勵行し、取引上での詐欺詭計を取締りこれを處罰する。この仲間團體は仲間の利益擁護の團體であり、同時に仲間への加害に對する防禦團體であつた。官民をとわず、しばしば萬年豐からの攻撃彈壓の目標になつた。萬年豐は全市の消防隊を支持するというような市政にも參與していた。それはまた汕頭港に出入する船舶の貨物に課税した<sup>⑥</sup>。

私はさきに洪江の十館首士に示されているギルドマーチャントは、重慶の八省會館の場合に類するといつた。少くともその構造の點からいえば、この八省會館の場合に近いものがあつたといえよう。それではその具體的機能の點ではどうであらうか。資料にあらわれた限りでは、これまたこの重慶に近いものがあるようである。私がこのようにあいまいにいうわけは、一つには私の資料とする洪江育嬰小識が、特別な條件をもっているからである。洪江育嬰小識

はもともと棄兒の收拾および貧困者の救済、民兵隊、警察隊や消防隊の組織運営というような事業を内容とした文獻である。ここに示されたような事業は、役人の行ふべき職務の範圍のものであるが、役人はそれをギルドマーチャントに押しつけていたものであり、ギルドマーチャントもその押しつけを「いや」とはいえぬ破目におかれていたのである。また打ちすてておけばそれだけ封建社會がくずれ、商業資本が自らよつて立つ基礎を失つてゆくのであるから、ギルドマーチャントとしても、かかる社會矛盾への對處を餘儀なくせられていたのである。しかもギルドマーチャントも役人へのもたれかかりに何等かの利益をみていたといえよう。このような關係を内容とする文獻自體は、自ら、役人と商業資本との合作となつてゐるわけである。かくてそこには商業規制や商業資本の仲間的利己主義を貫こうとする方面はほとんど——全くといつてよいほど——あらわれていないし、そのようなことをこの文獻は當面の問題としてはいなかつたものである。従つてこれによつてギルドマーチャントをえがこうとすれば、資料不足とならざるを得ないであらう。しかしそれでありながら、この文獻につい

ては、また別の見方が成りたたないわけではなく、そこからギルドマーチャントがもつ商業規制や商業資本の仲間の利己主義の指向をひき出せる手がかりがないとはいえない。

洪江の十館首士の組織——いわゆるギルドマーチャント——の記事が洪江育嬰小識のなかにはじめて登場するのは同治五年（1866）である。といつてそれは十館首士の組織が成立した年代とは同じではないであろう。同治五年は洪江地方政府がこれまであつた團防局の運営、つまり當時の民兵隊の運営を十館首士に委託した年である<sup>①</sup>。それはこのような委託をうけるために十館結合をとくに構成した年ではないであろう。同治の後、光緒年間にはほとんど例年、役人側は、行政上の役目を十館首士に直接間接におしつけ、商業利潤をけずりとつてその運営にあたらせていつた。洪江育嬰小識の内容はこうしたことの記録である。それは同治五年以前の十館結合を書くことを目標としていなかったし、同治光緒年間以後のことでも、商業規制などを記録しなくても別段差支えはないものであつた。同治五年前における十館結合の成立事情は、この文獻に書いてある

こととは別な、もつと直接的にギルドマーチャントにかかわりある商業規制ないし仲間の利己主義實現の問題であつたのではなからうか。たとえ十館結合が表面は、宗教的結合に出発していたのであるとしても、何か共通の經濟的利害が結合の基礎にあつたことを考えるべきではなからうか。

洪江における十館結合の成立年代の下限は文獻で知られるところでは、上記のように同治五年と思われる。それではその成立年代はいつか。それについてははっきりとはつきとめられないが、上限の見當はつく。十館の古いものは清代では康熙雍正乾隆年間に建設されたと書いてある。新しいものは貴州會館の嘉慶二十二年（1817）、衡州會館の道光二十八年（1848）である。湘鄉會館の建設年代は空白のままである。ところがこの湘鄉會館については、貴州、衡州兩館につづいて書かれていて、しかも「同・時・崛起、稱十館焉<sup>②</sup>」ということである。これによつてみると十館結合の上限は道光二十八年となると思う。従つて十館結合の成立は、咸豐年間前後の時期にあつたものと思われる。おそらく洪江ギルドマーチャントは、少くともこの時期に——十

館でなくて、もし數館の結合でよかつたなら、あるいはもつと古い時期に——自己の利益のための結合として出發したものであつたらう。商人仲間は自分たちに利益をもたらしぬことをわざわざ自ら進んで實行するはずはない。しかし役人は自己の都合のために、ないしは自己の怠慢の穴うめのために、ギルドマーチャントを動かしそのもつ富力を利用した。またギルドマーチャントは役人にもたれかかることによつて自己の利益を消極的ながら守ろうとした。このギルドマーチャントの歴史については、最初自らのねらいを實現していつた時期と、その後、地方都市行政をあずけられて最初のねらいだけを追及できなくなつていつた時期との、二段階に分けて考えては如何であらうか。しかしこれは一つの想定であつて、將來これと同様な條件のいくつかの都市の歴史と比較して問題をたしかめてゆきたいと思う。

洪江十館のギルドホールにあたるものは、江西會館の東隣に近い大佛寺であつた。ここを「十館公所」といい「十館值年治事之所也」などといつていた。<sup>⑨</sup>とくに特別の館名は用いず、もつぱら大佛寺の名で呼んでいた。<sup>⑩</sup>またこの種

の記事によると十館首士は輪番でギルドマーチャントの事務を擔當したものと思われる。大佛寺の建設年代は記されていない。洪江のギルドマーチャントは軍隊、つまり自衛のために武装した民兵隊、警察隊、消防隊をもち、穀物を倉庫に常備し、棄兒を救い、種痘を施し、水難その他難民の救助などの任務をあずかり、このような方面で、市政に參與するようになっていつた。その経過は次の通りである。

(一)民兵隊は十館首士が地方政府から仕事をあずけられた最初のものであることは、前述の通り同治五年であつた。<sup>⑪</sup>もつとも民兵隊については、その前、咸豐年間、土着の有力者の手にまかせられ、公局を七屬館のなかに設け、壯丁を募集して訓練していた。そしてそのころは財政面について鹽商からの寄付金をうけていたが、まだ一般商人から寄付金を募集してもいなかつた。ところが同治五年(1866)になつてから、地方政府は、十館紳商に團防の任務を擔當させることにし、陝西館に團防局を開設し、武器も官給によることなく經費はもつぱら一般商人にひきうけさせた。<sup>⑫</sup>このことはその後、光緒六年その制度が停止せられるまで



つづいた。<sup>②</sup> (二) 十館首士が穀物を倉庫に貯え窮乏に備えることは、光緒年間に入つてからのことであつた。光緒四年 (1878) 洪江の商人は穀物の貯藏にふみ切つた。洪江地方は河川の氾濫などのため交通杜絶し、これまでも幾度となく穀物の不足を告げ、局地的に饑饉の状態を現出し、穀物の値上りも抑えることができなかった。地方政府にみきりをつけたか、政府に押しつけられたかした洪江商人は、平素から穀物を十館に分けて貯藏しておくことにし、必要に應じて義倉または常平倉のように倉庫を開いて穀物の安賣を行い、洪江市民の窮乏を救つた。<sup>③</sup> (三) 育嬰堂の開設問題がおこつたのは光緒五年 (1879) である。湖南地方だけに限らず舊中國社會では生れた子の生存は保障されてはいなかつた。養うあてのある人口、必要労働力を計つた上での人口を残し、あとは間引かれることが常態であつた。嬰兒殺害は、古く宋會要に孺子の名で見えている。孺とは田の草を抜くという意味である。<sup>④</sup> 嬰兒殺害の方法からいって溺女などともいつた。間引かれるものには特に女兒が多かつた。清代湖南では嬰兒を他人の門口に捨て、あるいは嬰兒の鼻口に石灰をつめてこれを殺害することなどが行われ

た。<sup>⑤</sup> 養兒を收養して育てる育嬰の事業は、清朝政府自ら行つていたことではあるが、洪江では結局これも光緒五年に十館がおしつけられることになり、光緒六年には團防の故地に育嬰局 (育嬰堂ともいう) を開設することになつた。<sup>⑥</sup> そしてその經營維持の財政的裏づけはほとんど洪江商人の負擔にかかつてくることであつた。<sup>⑦</sup> なお光緒十一年 (1885) 育嬰堂の後に保赤堂を建て、女兒を専らここで養育することになつた。<sup>⑧</sup> 次は四消防隊の組織運営、消防ポンプの常備および防火壁の設置についてである。洪江は沅江にのぞみ、山を後にひかえ、狭い地帯に數千家をつらねていた。そして近くは咸豐・同治の際など、しばしば火災に會い、ときには一千戸も、焼失する始末であつた。洪江地方政府は自らのり出してやるべき職務にもかかわらず、光緒四年には、十館首士をして、防火障壁 (火牆) をつくらせ、洋式ポンプ (洋龍) を購入して會館などに備えつけさせ、また消防隊を組織させた。消防隊員については、槽坊・絲煙店幫のような同業團體關係からえらんであてていた。<sup>⑨</sup> (四) 種痘 (點痘とか點種牛痘などという) の法は、嘉慶年間に中國に傳來していたが、光緒九年 (1883) になると、洪江地方政府

は洪江十館育嬰局の當事者をして、嬰兒に種痘する任務を負わせた。(丙)同じく光緒九年、地方政府は今度は十館首士をして惻隱堂の事業まで引受けさせた。これは育嬰局(育嬰堂)とならんで容易ならぬ任務であつた。惻隱堂は道光十八年、民間有志の創設にかかり、北辰宮に公所(治事公所)が設けられていた。その後、光緒九年までその事業は繼續されてきたが、地方政府は管理運営上の問題が起つた機會に、ついに十館首士に育嬰堂と併せて管理運営するよう押しつけ、後日問題がおこらぬためといつて、翌光緒十年には惻隱堂の規則十八カ條をつくらせた。惻隱堂の買入れていた土地には義山(共同墓地)の他に耕地があつて、耕地からは地代をとり立て經費の一部としていた。十館首士が管理運営をうけついだときは、財産關係書類もひきついだ。惻隱堂というのは、水難、火難、疫病などの際の難民救済事業のために設けられた施設である。水難の場合では、救生船を設けて水難者を救助し、浮屍をひき上げこれを義山に葬るのであるが、常時でも貧しくて葬式の出せないものに棺を給して義山に葬り、その他、義渡(渡し場)を設ける等のいわゆる社會事業を目標にしていた。洪

水や大火がおこり、あるいは疫病が流行するような場合の救難は全くの大仕事となつていた。(丁)十館首士は今度は保甲つまり警察關係の任務をもち込まれた。それは光緒十一年(1885)のことであるが、育嬰堂内に保甲局が設けられ、十館首士のうち十九人——當時、その十九人は江西臨江人二名、同じく南昌人二名、同じく撫州人と吉安人各一名、湖南では實慶人三名、衡州人、湘鄉人、瀘溪人、靖州人各一名、湖北黃州人一名、貴州では鎮遠人、古州人各一名、安徽寧國人二名、福建汀州人一名——が保甲事務を擔當することになつた。保甲のような警察の任務は官憲がなすべきはずのことでありながら、洪江十館首士はこれも押しつけられていたのである。この地方では街道を十六牌に區分し四季ごとに戸口調査を行い、「什伍聯坐の罰」を設けて、常時、犯罪者を隣里のなかから告發せしめ、告發を怠るときはこれに連坐せしめて犯罪者を取締つた(一家有犯、隣里無不受其拖累)。ことに湖南地方は反清復明・滅滿興漢を旗じるしとする哥老會の地盤であつただけ、政府はそれを氣にすることがとりわけ大きかつた。なお、光緒十一年のことであつたと思われるが、十館首士が (イ)道路や (ロ)

橋梁の修理をうけもたされた事例がある。また(十)光緒二年(1876)、十館首士が中心となつて棉製の寒衣(冬着)を施し、冬季の救済事業にあたつた事例がある。

洪江の十館首士は同治から光緒にわたつて、このように次から次へと市政の空白をうづめるために、自己の負擔において市政に參與をよぎなくなれたが、このような受身でなくて積極的に參與した場合もあつたろう。そしてその場合、十館首士らの主觀的意圖が「積善餘慶」「善因善果」の期待にあつたことも、あながち否定するには及ばない。しかしそれだけで市政參與の説明がつくものではない。

①地元の油號はギルドマーチャントの主體を構成するメンバーに加つていたかどうか。もつとも油號は、山西幣のなかにも見出すのであつて(前節註⑨⑩)、地元のものばかりとはいえない。なお洪江育嬰小識卷一識輸助の「査洪市油號、熬做供油、歲不過三百萬斤」とあるように、油號は手工業者でもあつた。

②油牙行のなかには貴州天柱縣人もいた。第一節註⑥参照。洪江育嬰小識前掲、帖捐始末に書いてあるように、桐油の牙行は「僅司過秤、坐收用錢」つまり油を秤にかけてはかつて手数料(用錢Ⅱ用錢)をとるものである。第一節註⑥では用銀。

③註⑬⑭⑮参照。

④今堀誠二「中國におけるギルドマーチャントの構造」(近代中國の社會と經濟 昭和二六年三月)二〇七頁以下、ことに二一一

頁。同「中國封建社會の機構」(昭和三〇年三月)二八頁以下。

⑤⑥根岸佳「支那ギルドの研究」(昭和七年一月)三一九頁。

⑦洪江育嬰小識卷四國防補識「(咸豐)六年、該逆陽受黔撫、陰奉乞兒吳三童爲魁、勢再熾沿邊諸州縣皆設防、洪江團練以土著士紳主之、設公局于七屬館、召募丁壯嘗數十人訓練偵探、于時淮網斷絕、借食川粵鹽、始募人捐領鹽行牙帖、提二成鹽用充國防費、特客籍商賈不預其事、……五年(同治五年)苗仍由朗江犯託口、……巡檢王英傑因請于縣、刊發圖記、以十月初四日、于陝西館別開國防局、改由十館紳商經理、期收實效、募練一軍、助防備剿、旗械一切、不虞于官、率皆就地籌備、酌議店戶大小、認抽月捐、作爲經費、于是相地修築西南等關、始講求自守之法、……同治五年以後、亂云極矣、于是人自爲守、認真國防、廬間營別練一軍、事急募至六七百人、緩亦百數十人、兼以其時製器械、峙糗糧、設關險、葺道路、當務爲急、前後用經費至十餘萬緡之多、月捐既停、議以一二五成抽捐房產佃租濟用、不足、復由十館派捐、大都客籍殷商、就地竭力籌備、同仇敵愾、衆志一心、則巡檢王英傑實主持之、……」

⑧前節註⑥。また前節の會館の記事とその資料参照。

⑨次の資料のほか、なお前節に列舉した會館名のなかに介在する大佛寺の記事参照。

洪江育嬰小識卷一識圖說「江西館、在大河邊、日桅桿坪、左爲貴州館、右爲大佛寺、十館值年治事之所也」

同上卷一識緣記「國朝雍正初、詔直省州縣成立育嬰堂、歲支經費、分別報部覈銷、厚澤深仁、無不誠求保赤、洪江去縣百餘里、生齒日繁、生理墊隘、子女愛薄、蓋出於情勢不得已耳、溺

女聚嬰、事所時有、吁亦慘矣、至若無故而鬻其子女者、要不數觀、邑侯張君憫之、首出錢六百餘緡、命團防局側隱堂十館紳首創辦收養、……未幾裁團防局、於是專由十館承辦、議者謂選用紳首、難在得人、賢者薄而不爲、不肖者遂圖私便、推諉侵蝕、弊皆不免、不如用館名由大佛寺值年輪流交接、羣策羣力、公同經理、庶乎歷久不替、議遂定、善基之固、得力在此、六年四月、就團防故地設局試辦」

⑩前註の識緣記參照。

⑪⑫註⑦參照。また註⑨に引く卷一識緣記。

⑬第一節註④參照。

⑭洪江育嬰小識卷四識積數「同治丁卯五月霪雨連縣、米價陡漲、時黔氣肆擾所在、田不得耕、湘軍大舉赴援、兵米皆取給洪江以上、流通四至餓殍相望、幸在事父老、稔知年前歉收、家無藏粟、預輓川鄂米在道、至是平糶、爲時一月有餘、舖活甚衆、凡費用金錢三千餘緡、率就地捐集籌辦、斯時固無所謂積數也、光緒四年安肅張侯鼓舞激勵、始捐積穀三千石、分儲十館、各自經理、九年請于何侯、春夏推陳出新、糶半留半、秋後買補歸倉、……至十二年丙戌五月、米價猶賤、望後雨澤忽愆、日逐騰踊、六月斗米貳錢六百五十六文、米艘益不至、人情洶洶、汪侯馳諭開倉、遂于山陝館福建館兩處、減價平糶、未幾倒困垂罄外來老弱就食者四五千人、……」また第一節註④參照。

⑮仁井田「支那身分法史」(昭和十七年一月)八一七頁。

⑯洪江育嬰小識卷一恭識政典、湖南巡撫部院劉示。

⑰戶部則例(同治十三年本)卷九十育嬰堂事例、福建省例卷十六嚴禁溺女、湖南省例成案卷三戶律戶役收養孤老、粵東省例戶例

卷二については、仁井田前掲八一五頁以下、八二九頁以下參照。また清代の育嬰の制度施設については、清國行政法(明治四四年二月)第四卷一九八頁以下參照。

⑱洪江育嬰小識卷三識側隱上。敬稟者、竊維育嬰保赤、乃仁政之一端、掩骼埋胔、宜推行於永久、卑邑民多瘠苦、每有溺女之風、光緒六年經卑前縣楊令靖瀚督飭紳士並所屬洪江十國會首人等、籌集經費、於洪江地方、設立育嬰堂壹所、收養嬰孩、由十館首士認真經理、所有辦理章程、業經楊令暨接署縣呂令體贊、先後具稟立案、……查側隱堂之設、與育嬰局同係善舉、隨飭十館首士、將側隱堂事務歸併育嬰局兼辦、以一事而省工資、並令妥議章程查核、茲據十館江宗盛、吳鼎和、福昌隆、貴鼎新、黃齊安、盛南都、王有柱、衡錫齡、湘萃庭、洪惟先、公議章程十八條、呈請通稟立案前來、卑職查所議章程、均屬周密允妥、除飭令該首事即照章實力實行、認真辦理、期善舉永垂、勿使終懈外、所有卑縣設立救生側隱堂歸併育嬰局十館首事兼辦、議定章程緣由、理合稟請鑒核批示立案

一前重楊紳冊開、所置義山田土房屋等業、共伍拾柒契、勘收明白、又現存銀玖拾貳兩陸錢柒分、錢壹百伍拾玖千文、穀壹百參拾陸石、棺木伍拾貳具、點收明白、一併登註簿記、呈縣鈐印存堂、永爲確據、以後續置產業、隨時稟請存案並登記印簿

一十館值年首士、各有執業未能親理堂務、公議並歸育嬰局總辦兼理其事、內請司事一人、專司驗票發棺、填註號簿、經收房租田租、……每月正月二十日請齊十館育嬰局紳首、公同清算一年帳目、彙造四柱清冊呈縣、……

一堂內田租房租、額收無多、尤賴仁人善士隨時樂捐、頗有贏餘、

放安生息、續置業產、以厚善基、而擴善舉、……

一本堂在於大灣塘設有救生船一隻、歸堂修理油艙、僱定就近船夫一人、每年工食錢參千文、三節分給平時看照船隻、水漲添人出河、救獲活人一名、給錢貳千文、撈獲浮屍一名、給錢參百文、此外凡有撈救、均照此數給賞、但均必投明地保驗明、毫無別故、方准領木殮埋、設屍身有傷、稟官查辦

一本堂施棺置山、原爲殮葬水灾浮屍、及陸地乞丐貧孤無主死屍、免致暴露、是必責成該地保驗明無故、方准來堂領棺埋葬、……一本堂原領前帶水師周軍門捐設竹瓦溪渡一隻、每月額給渡夫工食數壹石油鹽錢參百文、並本堂加造木橋一渡、以便冬涸行走船橋、均歸本堂修理

また註⑨および第一節註④參照。

①前節註⑨⑩參照。

②0 洪江育嬰小識卷二識規條、卷三識惻隱上。註⑬參照。

②1 洪江育嬰小識卷三識火牆水龍「(光緒)六年、……嗣後不復集資、遂歸諸十館值年經理、于是乎火牆之事乃大備、維時州刺史盛公、……責成十館首事、購買大西洋水龍、於是江西會館捐置一架、名曰萬安、今存惻隱堂、九館合捐一架、名保安、存衡州會館、廖碼頭澄安街者、居全市之中、同時別捐一架、以其街名之、存徽州會館、條約分明、……重修火牆記「爰集十館首士、一視同仁、自四牌舖店爲始、及松林碼頭爲止、皆量力以捐輸、……(光緒)六年庚辰仲春月」州正堂盛爲諭飭遵照事、……特查購辦洋龍、每架約需銀數百兩、……爲此諭仰該紳商等、……諭洪江十館首士(光緒)六年四月」澄安水龍條約八章、一長雇正掌龍一人、副掌龍二人、歲給工值錢四千、拾龍及水手

十八人、在本街槽坊絲煙店幫、雜內選充、每人歲給工值錢一千、……」縣正堂杜爲出示曉諭事、……蒙前州縣札飭十館公置洋龍二架、……(光緒)八年七月」

②2 洪江育嬰小識卷二識牛痘方藥。また得一錄(光緒乙酉重刊)卷二保嬰會規條(無錫青城鄉原本)にも、嬰兒に種痘することが見えてゐる。

②3 洪江育嬰小識卷三識惻隱上「道光十八年戊戌閏四月、貴州涪水爲灾、鎮遠府尤酷、淖斃人畜、浮屍順流下、達於洪江、靖州楊錫齡厚堂尤深憫焉、與……楊在賓雁飛等、捐買義山、募人拯瘞、同時有寶慶禹心田……等、樂善輸助、創設惻隱堂、于大灣塘地方、常設救生船一艘、專拯浮屍、其陸居貧戶無力殮葬者、給棺具埋資、編葬義山、水陸異兆、男女辨羣、公議條約、呈請黔陽會同縣立案施行、贏餘捐資、貸取什一之息、供歲用經費、初借北辰宮爲治事公所、……二十九年古樓脚火、賑被災難戶、夏、大水、流民四集、餓殍相望、堂用驟增、租息入不敷出、……咸豐五年以後、黔中糜爛、避難紛來、瘟疫流行、死亡枕藉、厥後天柱縣屢陷于賊、男婦殉難、死者乘漲漂至、嘗數十百人、水陸施棺、日不暇給、……垂四十餘年、至光緒九年始交十館接理、綜計實存田產三千緡以上、較之初捐有增無減、……」

②4 洪江育嬰小識卷三識惻隱上。縣正堂何爲諭飭接管事、照得、洪江惻隱堂一事、因生員胡開瑞屢控經營之楊光瀛等在案、昨經本縣批由十館首士遴選公正紳耆妥人接辦、施據十館首士稟請歸併育嬰堂接管兼辦、每年出入帳目、由十館值年公核造冊、申賢備案、嗣又據續稟、……今本縣將胡楊訟案訊結明白、惻隱堂自道光十八年至光緒九年止、一切出入施行帳目、及置買樂捐各契據

等件、當堂核算驗明封存、合行諭飭、爲此諭仰育嬰堂首士卽會同十館首士、將後開各項帳簿契據銀兩等件、公同逐一查明經收、所有惻隱堂事務、卽歸併育嬰堂兼理、……

計發來木箱壹口

田房契據伍拾柒張、捐契三張、各業老契壹包、帳簿拾肆本、草簿記事壹束、各業領字壹包、各業租帖壹包、錢糧秋米倉數票共壹包、紋銀壹封、計重參拾陸兩零、鑰匙壹把

諭 洪 江 育嬰堂  
十館首士

光緒十年四月二十七日

註⑨また第一節註④參照。

②⑤ 洪江育嬰小識卷三識惻隱上。

巡憲何批、據稟將紳士楊錫齡等設立救生惻隱堂、歸併育嬰堂。十館首士兼辦、係爲杜訟息爭起見、所議章程十八條、尙屬妥協周密、准如稟立案、仰卽督飭該首士等照章實心實力、認真辦理、總期善舉永垂、不至日久廢弛、是爲厚望、……

諭 洪 江 育嬰堂  
十館首士

光緒十年八月二十六日

また註⑬參照。

②⑥ 註⑬⑭參照。

②⑦ 註⑬參照。卷三識惻隱下的記事によると、惻隱堂救生船は一艘で、道光十八年に設けられた。救生船については森田明論文、前節註②。

②⑧ 洪江育嬰小識卷四識保甲。

中興日久、改團練爲保甲、夫團練主折衝禦暴、保甲則惟事稽查戶口而已、因時施教、因地制宜、各州縣情形不同、……洪江僑居浮寄、月異而日不同、與土著城廂有間、難盡以文法拘、乃延訪各省老成之有宿望者十九人、以爲局紳、就團防故地、今育嬰堂內、別設保甲公局、鄭重其選、專意清查市廛戶口、四季仲月、覈實覆查、事畢、造具待查自新另冊實辦、申什伍聯坐之罰、省吏胥約保之擾、頒定章程簡節而疏目、期于日久相安得其大意而已、

會同縣爲申報事、……茲于育嬰堂十館首士內、擇舉公正紳耆共十九人、諭飭專辦保甲事務、實力稽查、已于六月二十四日設局惻隱堂內、……酌定章程、每季編查一次、春秋仲月、卑職親詣覆查、由近及遠、逐漸加密、務使外匪無從託足、……（この本文の後に江西臨江人以下十九名が列記してある）

諭 洪 江 保甲局紳  
十館主事

光緒十一年八月十二日

前節註⑩また第一節註④參照。

②⑨ 洪江育嬰小識卷四識保甲。

③① 洪江育嬰小識卷四識保甲。

縣正堂汪爲曉諭事、本縣訪問黔陽芷江境內、均有哥教匪會茶之案、……爾等毋論貧富、各有身家、務當安分守己、各謀正業、父誠其子、兄勉其弟、無得混聽匪人煽誘、妄希非分、……一經敗露、首領身家莫保、試思從前逆匪何嘗一人伴逃法網、可爲深戒、同居牌內、有形迹可疑及不法之輩、並應互相糾察、不與聯保、一家有犯、隣里無不受其拖累、是在隨時留心、如畏該痞匪

報復、不敢公然首告、許將實在憑據、逕赴保甲局密呈、立予嚴  
拏、訊實審辦、並不彰露該首告姓名、以示保護、……

光緒十二年十二月初三日

註②參照。

③洪江育嬰小識卷四識保甲「本年春夏之際、陰雨兼旬、洪流疊漲、  
竝溪道路與絕水之梁、先後皆毀、其要亦略分三道、……確估修  
築、計長六十餘里、需錢六七千串、工費至鉅、已諭飭十館首事、  
勸令好善之家、擇要修理」

④洪江育嬰小識卷四識寒衣。また第一節註4參照。

⑤湖南省例戸律戸役卷三收養孤老に育嬰堂建設等の記事がある  
が、出捐者も多くは役人であつて、湖北鹽商、江南客民、また

湖南では長沙縣などの郷耆里民が多少名を出しているだけであ  
る。資料の時代は乾隆どまりのものである。岳州救生局志（光  
緒元年仲冬刊）には同治年間および光緒初年までのことが書い  
てあるが、この場合の出捐者も役人が多く、その出捐額も役人  
が多い。辰州救生局總記（同治十二年刊）、峽江救生船志（光  
緒三年丁丑仲秋刊、ただし光緒四年戊寅正月序がある）。これ  
ら湖南湖北關係文獻にはギルドないしギルドマーチャント關係  
の記事は見當らない。なお仁井田「中國法制史研究」（家族村  
落法 昭和三七年三月）四九七、四九八、五〇五頁に、救生局  
を救世局としたところがあるのは誤植。

（昭和三八・一・二一）